

「刃物と歴史のまち 堺のブランド力」

樋口 清士

1. 刃物のまち堺

堺 HAMONO ミュージアムにおいて堺刃物について話を伺った。堺の刃物生産はタタラ製鉄の量産体制が整った室町時代からスタートしたとのこと。以後、徳川時代には幕府が「堺極」の印を附して専売としたため、そのブランドが確立したと言える。

しかし、近年台所回りから鉄製品が失われる中で刃物生産に携わる事業所が減少してきている状況がある。刃物の鍛造、研ぎなど技術の継承には10年かかると言われる中、業界として弟子を採り技術の伝承に取り組むとともに、府立工科高校と連携した若者を対象としてモノづくりの楽しさを教える取り組みが展開されている。また、これまでユーザーに対するアフターケアが足りなかったという反省のもとに研ぎ方教室を行うなど、堺 HAMONO ミュージアムを拠点にPR等に努められている。

堺刃物は、愛知県の企業に「堺極」の商標を獲られるなど、商品のブランド化、ブランド展開に遅れをとってきたと言える。また近年は中国産の安い刃物が出回る中で価格競争にも巻き込まれる可能性が高まっている。

しかしながら、国際デザインコンペの結果、新しいデザインと機能性が整合しないこと、機能性を追及すれば現在の堺の刃物の形に戻っていくことが再確認されたというお話は、今後のブランドを考える上で示唆的であった。つまり、歴史の中で、人々の使用の中で練り上げられてきた形や様式といったものは普遍性を持ったものであり、これがブランドの力となる。時代のニーズにあまりに迎合しすぎると直に飽きられる。本物を作り続け、本物の良さを伝え、高くても本物を買ってくれる人に、本物を売るという地道な努力こそがブランド戦略の基盤をなすのではないかと思われる。その基盤の上に時代の新しい価値観に合わせ時々の工夫を行うことは必要であると思うが。

近年のユーザーは職人の他、本物を求める料理を趣味とする男性が増えてきているとのことであり、本物を作ることへの拘りの先に、これまでと異なるマーケットが見えてきているようである。

また、堺には刃物以外に、伝統的産業として和菓子、線香、和ざらし、とんぼ釜などがある。町並みを探索する中で線香屋さんを見つけたが、昔ながらの店構えで昔



通り沿道に刃物関連の事業所が並び、ところどころに空き店舗があり近年の低迷の様子がみられる。



線香は堺の伝統的産業のひとつであり、歴史的な町並みの中に伝統が息づいている。

ながらの形でお商売をされていた。このようなお店があたりまえのように町の中に構えているところに堺の歴史の厚みと底力を見たような気がするとともに、堺という町のブランド展開の可能性が感じられた。

2. 歴史のまち堺

表通りを中心に「堺まつり」で賑わう中、「環濠都市・堺 歴史文化クラブ」の志賀さんのご案内のもと、堺の町の裏側を探索した。

堺まつりは今年で第34回目ということですから市民の憩いと楽しみの場となっていた。沿道に敷いたブルーシートの上で飲み食いしながらパレードを見学する様子を見るに、近代的な都市の中に日本の風情を感じた。



パレードの鉄砲隊は堺の歴史を象徴する一大イベントとなっていました。



街角ではおじさん達のバンドが演奏し、道行く人々の耳を楽かせていました。

街角にはおじさん達のバンド

があちら、こちらで演奏し、まつりに集まった人々に暫しの楽しい時間を提供していた。この日、大通りでは自動車の通行規制を行っており、車のない広場や歩道といった空間がまちの賑わいを創出する装置としていかに重要かが再認識できた。



観光施設として生まれ変わった鳳翔館。

この賑わう大通りから一步裏側に入るとそこには歴史的な建築物が残る町並みが静かな佇まいを見せていた。もう少し、まつりの滲み出しがあっても良いのではないかと感じたのは私だけであろうか。

大正後期から昭和初期の建築とみられる元酒屋さんの建物を、与謝野晶子を紹介する観光施設「鳳翔館」とするなど、歴史を拠り所とした観光都市を目指す取り組みが進みつつある。しかしながら、歴史都市としての認知度はまだまだ低いのではないだろうか。

特に地元で生活する多くの人々にとって堺の歴史はあまりにも当たり前で生活の一部として存在し、改めて感じられないものになっているのではないかと感じた。まだ数少ないその歴史を認識された人々が、町家の保全・活用に取り組まれたり、環濠の一部を建築物の前に残すなど歴史的な資産に拘られたり、その取り組みは始まったところである。今後このような地元の方々の取り組みが広がれば、内外に堺の歴史の認知度が広がり、観光都市としての基盤が形成されていくのではないかと。歴史都市としてのブランド力が高まり、その上で堺まつりのような現



かつての環濠の石組みが再現されている。

代的なイベントが相乗することにより、より多くの人々を集める状況が実現することに期待したい。